

《短信》

土左日記の「よるあるき」

——「よる」の複合的用法——

日野資純

キーワード…よる・よ・よるひる・よるあるき・よありき

土左日記承平五年一月三十日の条に

かいそくはよるあるきせさなりときよて

(影印本土左日記72ページ)

とあるが、この「よるあるき」については従来の注釈書で「夜の横行(大系47ページ)」「夜の行動(全集53ページ)(完訳342ページ)」「夜は行動をしない(集成35ページ)」などと解している。すなわち「よるあるき」を「よる+あるき」という複合語だと見ているのである。

ここで問題になるのは、日本国語大辞典、岩波古語辞典で、「よる(夜)」の用法がそれぞれ次のように解説されていることである。

○…上代では「夜(よ)」が複合語を作るのに対して「夜(よる)」は複合語を作らず独立して用いられた。(日本国語大辞典、「よる」の補注)

○…奈良時代には複合語に使わず、副詞的に独立した形で用いた(岩波古語辞典、「よる」の項)

両辞典では上代(奈良時代)と記してあって、土左日記のような中古の作品については別だという見方もあるが、上代にも、例えば「夜昼(ヨルヒル)」のような複合語があり、これは中古以降にも受け

継がれているのだから、右の記述に例外があるのは確かである。同時に中古以降の問題としても考えるべきことになる。

○吾恋者 夜昼不別 百重成 情之念者 甚為便無(万葉集卷十二 2902 作者未詳歌)

○みつさかの山の麓に、夜昼、時雨、あられ降り乱れて、日の光もさやかならず、いみじう物むつかし。(更級日記、大系489ページ)

右のように、実際には「よる」も複合語を構成しうるのであるが、それでは「よる」と「よ」との意味上の区別は何か。次の例が一つのヒントを与える。

○…山科乃 鏡山尔 夜(ヨル)者毛 夜(ヨ)之盡 晝者母 日之盡 哭耳呼 泣乍在而哉…(万葉集卷二 155 額田王作歌)

「よるはも よのことごと」とある以上、「暗い時間帯全体にわたる(ヨルハモ)、一つ二つと数えられる個々のヨのすべてについて(ヨノコトゴト)…泣いてばかりいたが」の意に解するのが穏当である。なお、ヨルは一つ二つと数えられないが、ヨは数えられるということは、上代以来「ひとよ(一夜)」の語はあつても、「ひとよる」の語のないことでも推測できよう。(…阿麻咩泥浞受邇 多儂比等用(ヒトヨ)能末(允恭紀歌謡66、大系古代歌謡集165ページ))

右のように、ヨルが暗い時間帯全体を表すのだと考えるならば、それに対応して、ヒルは明るい時間帯全体を表すことになるのであるから、「夜昼(ヨルヒル)」という語は「暗い時にも明るい時にもずっと続けて」の意となつて下へかかつて行くのだということが理解できるのである。

以上のように考えれば、初めに挙げた土左日記の「よるあるき」

を、次のように理解することができよう。

〔あるき〕を「あちこち移動すること」と解して、「海賊というものは暗い時間帯中には海上をあちこち移動しないものだ」と聞いて、ちやうど夜中のころに船を動かして阿波の海峡をわたる——と解するのである。すなわち、「よるあるき」を単に「夜の行動」のように置き換えるのでなく、「よる」が「よ」に対して、「暗い時間帯全体」の意であるという認識の上に立つて、「海賊はあたりが暗いうちなら出設しない」という知識に基づき、夜中の航行が実行されたのだと考えるのである。

ところで、「よる＝全体」「よ＝部分」という私見は土左日記の次のような表現からも立証されるであろう。

A、廿日きのふのやうなればふねいたさす(中略)いとわひしよるは
いもねす(一月廿日、前掲テキスト57ページ)

B、……とくやしかるうちによるに^{なり}てねに^{けり}(二月七日、92ページ)

C、……ひとひよとよとよとかくあそふやうにてあけに^{けり}(一月廿五日、21ページ)

D、白散をあるものよのま^{とて}ふなやかたにさしはさめりければ(元日、28ページ)

Aは悪天候のため心細くて一晚中眠れないことを「よるはいもねず」と述べているのであるから、「よる＝暗い時間帯全体」であり、Bは、「昼が終わって」よる＝暗い時間帯に入ったところで「寝た」のであるが、Cの「よひとよ」は、明るい時間帯を区切って「ひ」とし、それを一つと数えたものが「一日(ひとひ)」であり、暗い時間帯を区切って「よ」とし、それを一つと数えたものが「一夜(ひとよ)」

であることを示す。Dの「よのま」は、よるという全体は区切れないので、「その一断片であるよ」という一時的な短い時間帯(よのま)だけだから大丈夫だと思つて、白散を船屋形にはさんでおいたのである。実際には暗い時間帯全体にわたつて置いたのだが、意識としては「たった一晚の間だけ(よのま)」であつた。「よひとよ」の「ひとよ」と同じ発想であろう。

なお、Bの「よるに^{なり}て」に対して、
E、かゝるあひたにみなよあけてゝあらひれいのことゝもしてひるに^{なり}ぬ(一月十一日、44ページ)

の「よあけて」の場合に、「よる」でなく「よ」であるのは、「よる」の終末部がその一部分から明けて行く、という意識があつたためと考えられるし、「ひるになりぬ」は、夜が明けた後に「ひる＝明るい時間帯」に入ったことを示すのである。

F、……よふけぬとやありけんやかていに^{けり}(二月七日、35ページ)
では、「よる」の最初の部分である「よ」が「ふける＝時間とともに深くなる」のである。

Bが「よるに^{なり}て」であつて、「よに^{なり}て」でないのも、「よる」は「よ」のような「入り口」でなく、暗い時間帯全体であるから、そういう時間に「あたりが^なつたこと」「どつぷりつかつたこと」を表すからである。

また「みじかよ」「ながよ」「秋のよ」等も、それぞれ「暗くて短い断片」「暗くて長い断片」「秋の季節の中の暗い断片」として時間帯を取り出す場合の命名であるから、「——よ」となるのが当然である。この点から考えても、「よる」そのものは部分的に取り出しては扱えないものだったと見られるのである。

なお、「よるあるき」に対して「よありき」という語が、栄花物語とリベの巻などに見える。

あさましかりつる御夜ありきのしるしにや、(中略)いみじうわづらはせ給て、うせ給ぬ。(松村博司氏著『栄花物語全注釈二』301ページ)

こういう「よありき」は、夜、男性が女性のもとを訪れる意として安定していたと見られるが、これは同じく栄花にも現れている「夜行(ヤギヤウ)」「(百鬼夜行)」などの「夜行」に対する和語であると思われるかも知れず、今日のヨアルキに受け継がれるものではありえても、土左の「よるあるき」とは直接の関係はないと見られよう。

また「よありき」は、複合語の構成法としても、ヨアケ、ヨフケ等と同様な、「名詞+動詞連用形」という一般的な型に従ったものである。

以上、土左日記の「よるあるき」から出発して、「よ」と「よる」の意味の相違の論議に及んだのであるが、最後に、この二語について論及されている先行文献を一点紹介し、私の考え方で、そこに出示されている疑問点がどのように処理されるかを述べておきたい。

馬淵和夫氏『今昔物語集卷二十九文節索引』(東京教育大学国語国文学会・説話文学国語部会編、昭和41年4月刊)の「あとがき」に、今昔の「夜」「夜ル」の語に関連して、「ヨフケ」「ヨアケ」等はあつても「ヨルフケ」「ヨルアケ」などの現れない点につき、「前者のように文の主語ならヨとなり、ヨルは連用格か助詞を伴う連体格だけに現れる」という主旨を述べたのち、「ヨル」が文の主格にたちえないということは、『ル』が修飾的な用法をもつ接尾辞であるからかもしれない(95ページ)と結んでおられるが、本稿で述べた私の分析によれば、これはそういう「用法」の問題以前の、ヨとヨルの意味の相違に起因するものであると言えるのである。すなわち全体の時間

あるヨルがその一部(ヨ)から深くなつて行つて「暗」の時間となるのがヨフケであり、その末尾の一部から「明」の時間へとつながつて行くのがヨアケである。ヨルは全体の概念だからアケたり、フケたりすることはなく、従つてヨルアケもヨルフケも語としては成立しなかつたのだと見られるのである。こう考えると、ヨルは、人間がおかれて暗い時間の全体だから、その端がアケたり、フケたりすることは、全く当時の日本人の思考の枠を超えることだつたという結論になる。

以上のような考察に基づけば、最初に挙げた土左日記の「よるあるき」を含む文は、「海賊は暗い時間帯の範囲内では出設しないものだ」という文脈で、適切に理解することができるのである。

なお、先に記したように、岩波古語や馬淵氏の説で、ヨルは主格に立たず、連用修飾語になると述べられているが、それは次のような理由によると見られる。例えば今昔物語集卷十三の第十六話で、

……而ル間、宿願有ルニ依テ八幡宮ノ宝前ニ参詣ス。宝前ニシテ夜ル法花経ヲ誦スルニ、傍二人有り。(日本古典文学全集今昔物語集(1) 397ページ)

とある場合の「夜ル」が暗い時間帯の全体を表すため、その「夜ル」に起こる事件はすべてその時間枠内に進行することになる。このため、「夜ル……[事件が起こつた]」のような表現が必然的に現れて来て、文法上はそのヨルが連用修飾語となるのである。

—— 静岡英和女学院短期大学教授 ——

(平成元年十一月十六日 受理)